

カローシュティー文書中の仏教 梵語の偈頌について(1)*

岩 松 浅 夫

1 はじめに

ここで「カローシュティー文書」というのは、前世紀の末以降中央アジアの特に東トルキスタン (Eastern Turkestan. 現在の中国・新疆ウイグル自治区) 地方の古遺跡を中心に発見・発掘され、将来された所謂カローシュティー (Kharoṣṭhī) 文字による一連の文書群のことを言う¹⁾。

それらカローシュティー文書の大部分は、3次 (若しくは4次) に亘るイギリスのスタイン (Sir Aurel Stein) の同地方への探検²⁾によって発見・将来されたものであるが、その彼の将来品は、彼以外にもハンティントン (E. Huntington) によるもの数点とともに、その後英仏の学者によって全てローマ字に転写された上で、【カローシュティー文書集】 (*Kharoṣṭhī Inscriptions*) として出版がなされている³⁾。それらは、内容的には王の勅令や契約書等の言わば世俗文書の類が殆ど大部分を占めるとされるが⁴⁾、しかし、中には数はそれ程多くはないものの、宗教——具体的には、ここでは仏教——に関係あると見得るようなものも別に幾つか含まれていることも知られている。更に言えば、そのような特に仏教に関係すると見られるような中のあるものに対しては、これ迄にそのことが指摘され、或いはまた実際に研究も行われ (始め) てきているのであるが⁵⁾、いずれにしても、このカローシュティー文書中の仏教関係の (と見得る) ものに関しては、これ迄研究も必ずしもそれ程十分になされ、乃至なされてきたとは言えない面もあるようである。そこで、ここではそのような、主として

(2)

スタイン将来のカローシュティー文書類の中から特に仏教に関係すると見られるようなもの幾つかを選び、それについて、筆者なりに改めて若干の検討—考察を試みてみることにしたい。

ところで、そのカローシュティー文書の中には、特に 'bodhisattva' (菩薩) や 'mahāyāna' (大乘) などのように一見如何にも大乘仏教の存在を窺わせるような語の記されているものの存することは夙に知られているが⁶⁾、しかし、これらの語はそこでは言わば称号若しくは形容語的に使われているだけであって、したがって、それつまりそのような用語が見られるということだけでは、文書そのものの迄が仏教のものだと判断して言うことはできないであろう。それらは、実は散文で表された世俗文書ということになるわけであるが、その意味では、したがって、そのように仏教の、若しくは内容的に多少なりとも仏教に関わりあると見得るのは、現在知られている限りでは——少なくとも、筆者の知る限り——、いずれも長行 (散文) ではなくて偈頌 (韻文) で表されたものということになる。そこで、ここでもそのようなつまり偈頌で表されたものの韻律 (metre) の解析・解明と、それ——韻律 (の長短調) ——に基く (可能な限りの) 原形への回復・復原、及びその (想定される) 復原形からの和訳等のことを試み行うのが、当面の筆者の課題—目的ということになる。

2 導 論——カローシュティー文書中の偈頌とその言語——

カローシュティー文書の中には、明らかに偈頌で表され、若しくはそう認め得る (と思われる) ものが幾つか含まれているが、その最も代表的でまた典型的な例が、No. 523⁷⁾であると言ってよいであろう。すなわち、同文書——ただし、両面ではなくて裏面のみ——には、一見してそれと分かる形で偈頌が4連記されているのであるが⁸⁾、しかもそれらの4連は、いずれもそれぞれ異なった韻律で表されている、といった種類—性格のものでもあるというわけである。具体的には、それらの韻律は順にそれぞれ Upajāti, Vamśasthā, Vasanta-tilaka, Ārya の如く表されているわけであるが、一方また、これらの偈頌は言語的に見ても極めてサンスクリットに近く (特に他の偈頌や文書と比較した場合

に)、極く僅かな例外とも見得べき場合や例——例えば、連声法の不首尾若しくは不徹底など——を別にすれば、むしろ殆どサンスクリットそのままと言ってもよい程の言葉で表されている、といった特色も見受けられるというわけである。ということで、この No. 523 は夙に学者の注目を集め、実は先述の『カローシュティー文書集』の出版に先立って既に解説や研究がなされ、紹介もされていたというものであるが⁹⁾、ただ、これの性格、つまりこれら各偈頌の出典はそれぞれ何で、また一体どのような意図乃至目的でこのような形に纏められたのか等々のことに関しては、まだ必ずしも十分には解明されず¹⁰⁾、他方また、内容的にこれを見た場合にも、果して仏教とどれ程の関係があるのか、仏教のものと断言・断定することができるのか、必ずしも問題なしとはし得ない面もあるように思われる¹¹⁾。ともあれ、いずれにしても、この No. 523 は、数あるカローシュティー文書の中でもかなり特異で、また特殊な地位を占めるものではあると言ってよいであろう。

ところで、該カローシュティー文書の中には、その No. 523 以外にも、明らかに偈頌で表され若しくはそう解し得る(と思われる)ものが別に幾つか含まれ、或いはまた、偈頌か否かの判定は難しいものの、内容的に見て明らかに仏教に関係し乃至仏教のものと解し得るようなものも決してないわけではない。例えば、今試みに、カローシュティー文書のこれ迄の研究に対する林梅村氏の文献目録¹²⁾を参考にそのようなものについて調べ検討してみると、Nos. 103, 204, 501, 510, 511, 514, 647 等の如きをそれらの例として挙げる事ができるのである。因みに、実はこれらは、同氏の目録では「仏教文学」(Buddhist literature)としてその項目下に纏めて収められているものであって、そこでは実際に、これらの中の Nos. 103, 501, 514 の3つはともに 'unidentified literary fragment' と、また No. 204 は 'Anityavarga of Udānavarga'¹³⁾、No. 510 は 'Prātimokṣasūtra', No. 511 の表面と No. 647 はともに 'Sanskritized stotra', そして No. 511 の裏面は 'Vinayapiṭaka fragment' と、それぞれ分類・整理され証定?され(呼ばれ)ているものでもある。それはともかく、これらについて見ると、その中では不明若しくは判断が困難な No. 501¹⁴⁾を除く他の全ては

(4)

基本的に偈頌で表されていることは明らかで、また内容的にも程度の差はあれいずれも仏教に関係するものの如く思われ、一方また残る No. 501 に関して、その中には例えば 'śīla' 'satya' 'budha' 'śamatha' 'bhiṣṭu' 'vimukti' 等の仏教用語が散見——類見?!——されることから、内容的に仏教のものたることにはほぼ疑問の余地はなく思われよう、というわけである。

さて、そこで、その No. 501 を除く、偈頌で表された（と見得る）それらの韻律について調べてみると、そこにはさまざまなものが用いられていて、決して一様ではなく、また必ずしも一定していないことも知られる。ただし、とは言っても、極く例外的とも見得べき一部の場¹⁵⁾を別にすれば、同一の文書（テキスト）内では原則として同一の韻律が用いられていて、それに対する（確かな?!）反例は殆ど見られない、とも言い得るように思われるわけであるが。それはともかく、それらの韻律は、筆者が調べて確認し得たものに関して言えば、Śloka 即ち Anuṣṭubh はもちろん、それ以外にも例えば Triṣṭubh-jagatī, Vasantatilaka, Rathoddhata の少なくとも3つは認められ¹⁶⁾、その他、見方によっては——と言うのも、これは欠落字やサンスクリット乃至パーリ語等への還元が不能若しくは困難な語一字があるために、確言できないからであるが——Indravamśa と解し得なくないものも見られる、と言うことができるであろう。

次に、これらの偈頌——ここでは、しばらく No. 501 も含めてのこととする——で用いられている言語に関して言えば、これらには、綴字法的には所謂ガンダーラ語 (Gāndhārī. 西北方言 = North-western Prakrit とも) に特徴的とされるような様相が随所にそして数多く見出され、その点 (のみ) からすれば、したがって、これらは一見したところそのガンダーラ語で表されているようにも見受けられる。しかし、翻って、これらはいずれも偈頌で表されているということから、それ、つまり韻律法に基づく音節の長短ということを考慮に入れて、この点について改めて検討してみると、実はこれらには、当のそのガンダーラ語よりはむしろ仏教梵語（または仏教混淆梵語。Buddhist hybrid Sanskrit. 偈頌方言 = gāthā dialect とも）的とも呼ぶべき様相若しくは特徴の方が数多く見

られ、その意味では、したがって、より本来的にはという観点からすれば、後者即ち仏教梵語で表されていたと考えた方がよいように思われる面もあるわけである。実際、例えば(単綴の) *-k-* と *-g-*, *-d-* と *-t-* のような無声音と有声音の間の交替や、或いは(調音部位を同じくする) *-tt-* や *-ddh-* が *-t-*, *-dh-* のように、また *-kṣ-* も *-ch-* の如く、それぞれ重複子音が単綴されることなどは、顕著なガンダーラ語的な特徴の一つと言ってよいであろうが¹⁷⁾、そのうち、特に後者の例の場合においては、(*-kṣ-* > *-ch-* の場合も含めて) 例え単綴されていても起源的には複子音を表すような場合には、それら(単綴字)はいずれも韻律的には本来の、つまり複子音としての扱いを受けており¹⁸⁾、したがって、そのことを基に本来の複子音的な語形を想定してそれに回復・復原してやると、言語的には当のガンダーラ語よりはむしろ仏教梵語により近い、それと見得べき形のものになってしまう——若しくは、そうなることが多い——ということである。その一方ではまた、これらの偈頌には、正規の即ち古典サンスクリット (classical Sanskrit) と比べた場合には、ここでは具体的な挙例については省略するが、経典の特に偈頌の部分等に類見する所謂る偈頌方言即ち仏教梵語的な特徴も随所にそして顕著に見受けられる、ということ——事実もあるわけである。

とすれば、これらの偈頌は最初から現在の形のままだに表されていたのではなくて、成立論的にはもともと仏教梵語——若しくは、それに近い形の言語——で表され、それが現在のような一見したところガンダーラ語とも見紛うような形のものに改められたのではないかということも多分に考えられるということになろう。そして、実際に筆者はそのように推測・想定しているのであるが、その当否についてはともかく、ここではそのような、つまりこれらの偈頌はもともとは仏教梵語で表されていた可能性もあるということも念頭に置きつつ、その可能な(と思われる)ものの中の幾つかに対して、前述のことをできる限り試みてみることにしたい。

3 テキストとその再構成——私案——

(1) *Khar Insc, No. 103*

No. 103 は、形状上は 'oblong tablet' とされ、両面に書写されているが、その表面 (obverse) とされる一面に 2 行に亘って偈頌が書かれている¹⁹⁾。1 行目には 4 詩句 (pada), そして 2 行目には 2 詩句の計 6 詩句が残され、また各詩句の終りにはそれぞれ句末であることを示すためと思われる「○」印が記されている。ところで、この後に述べた例のように、各句末毎に記号を付してそのこと (句末) を表すのは他には余り見られないようなので、その点は或いはこの文書だけの特徴ということになるのかもしれない。一方また、サンスクリットなどの古代インドの作詩法では通常は 1 偈は 4 詩句から構成されるのが原則であるが、これの 1 行目を見ると前述のように 4 詩句が書かれている等のことからすれば、或いはこの No. 103 では 1 行毎に各 1 偈ずつ書かれていたということになるのであろうか。尤も、2 行目の第 3 詩句以下については、果してそれが書かれていたのかどうかということも含めて、不明なので、その点に関しては詳しいことは何も言い得ないということになるわけであるが。

それはともかく、次にこれの韻律に関して言えば、写本——ここでは、暫くローマ字に転写されたテキストを指してのこととする——には欠字や不明の字、若しくはそのままでは判読不能 (サンスクリットやパーリ語等に還元—対応させることができず、したがって語義も確定できないため) の語句などが少なからず見られるので、必ずしも確定的に言うことはできないが、文字=音節の数や (推測・想定される) それ (音節) の様子、すなわち長短調の在り方等からすれば、恐らく *Triṣṭubh-jagatī* (長短調は、 $\underline{U}-U | --U | U-U | -\underline{U} / \underline{U}-U | --U | U-U | -U\underline{U}$) と考えてほぼ間違いないと言ってよいであろう²⁰⁾²¹⁾。ただし、このように韻律についてはほぼ確認・確定できたとしても、前述のようにこのテキストには欠字若しくはそのままでは語義不明の語句等が少なからず——しかも、殆ど各詩句毎にと行ってよい程に——見られるので、例え 1 詩句だけと言っても、それを原形に回復・復原してやるのは極めて困難な (乃至、少なく

ともかなり難しい) ことのように思われる²²⁾。そして実際に筆者には、どの1詩句を採ってみても満足の行く形でそれを行うことはできなかったので、ここでは、已むを得ないということになるが、偈若しくは各詩句毎の復原や和訳等のことは断念して省略し、ただ一二の語句についてのみ、できるだけ韻律の要請にも合致するようにという形で、それに対する推測—想定される語形を示しておくことにしたい²³⁾。

jata - - bupatitā dhivaṅgama ○ ³	jātā U - būpatitā dhivaṅgama* ¹
caśura vaṃne atulahi p.ti va ○	cāśūra (?) varṇe atulāhi p.-ti va* ²
.i hoṭa māna akari patičhinu ⁴ ○	.i hoṭa mānā akarī patičhinu* ³
vera caḍ. bheṣi - čhina ra[u] ○	veraṃ caḍ.- bheṣi U čhina ra[u]
jatajite manu pravahita marutu ○	jātājite mānu* ⁴ pravahita* ⁵ mārutu* ⁶
nalaṃ tu na tu taru puṣpa kesari ○	nālaṃ* ⁷ tu nā tū (?) tarupuṣpa kesarī

3 *this circle has sometimes one and sometimes two diameters.* 4 *the line above the -chi- may be lost.*

*1 bhūpatitā divaṅgamāḥ?

*2 pārthivāḥ?

*3 pratikṣaṇam? *or rather* pradakṣiṇam?

*4 jātā (*or* jāte) jite mānu (mānu=manu < manuḥ / manavaḥ, *m. c.*)?

*5 =pravāhito/0 tā, *m. c.*?

*6 mārutā? *or rather* mārataḥ (*in instrumental meaning*)?

*7 nālaṃ (*or* nalaḥ)?

(2) *Khar Insc*, No. 204

次に、No. 204 は、形状上は細長い長方形様の板の一方の端に把手 (handle) の付いた 'takhtī-shaped tablet' とされるものである。文字は両面に書かれているが、その書き方は表裏ともに一様ではなく、特に表面はかなり複雑な書かれ方をしている。具体的には、先ず長方形の長辺部分にそれ (長辺) に沿って上下にそれぞれ2行ずつ書かれ、次いでそれら2行ずつの中間の部分に、今度

はそれをちょうど90度回転したような形で、短辺に沿って各5行ずつが2欄に分けて書かれているというわけである²⁴⁾。一方また、裏面の方についても、長辺に沿って6～7行の文(語句)が5欄に分って書かれ、それ以外にも更に短辺に沿って13行が別記される、という形—体裁になっている。とすることで、この No. 204 にはかなり複雑な表記法がなされているわけであるが、それはともかく、そのように複雑かつ多様に書かれている中で、当面のわれわれにとっての対象となるのは、表面の長辺部分の下側に書かれた2行——ただし、実質的にはその中の1行のみ——ということになるろう。すなわち、その部分のみが偈頌で表され、また内容的にも仏教に関わるものであるということである²⁵⁾。

前置きがやや長くなったが、この No. 204 については、すなわち、これの少なくとも当該の偈頌部分に関しては、内容的には実は既に知られているものでもある。その点に関しては前節の「導論」の項でも少しく触れておいたわけであるが、具体的には『ウダーナヴァルガ』(Udānavarga=Uv)冒頭の第1章「無常品」(anityavarga)の最初の2偈に対応するものだということである²⁶⁾。そこで、ここでもそのことを前提に、また既刊の『ウダーナヴァルガ』のテキスト等を参考にしながら、この No. 204 (の偈)に対して多少検討めいたものを試みておくことにしたい。

まず、『ウダーナヴァルガ』のテキストは、冒頭に'siddham'の語があり、次いで第1章が始まるわけであるが、章題等のタイトル類は通常はそれ(章など)の末尾に記されることになっているために、同書の場合には、一見したところその'siddham'の後直ちに本文——つまり、ここでは第1章の第1偈——が始まるような体裁になっている。ところで、『ウダーナヴァルガ』の第1章は前述のように「無常品」とされているわけであるが、実はその最初の2偈は内容的には章題の「無常」とは何の関係もなく、その意味では、同品は実質的に第3偈から始まると見ることもでき、むしろそう考えた方がよいようにも思われるのである²⁷⁾。すなわち、その冒頭の2偈は、言表や内容等のことから言って、「無常品」の一部というよりはむしろ『ウダーナヴァルガ』全体の序偈とも見得べきものになっているということである。そして、このことは、こ

れ (No. 204 の偈) の性格如何等のことがらその他について考察しようとする際に、かなり重要な意味をもって来るもののようにも思われよう。と言うのも、実はこの No. 204 もその冒頭に 'siddham' の語を有し、次いで前述のような「無常品」の冒頭の 2 偈へと続いていくわけであるが、それ以降つまり第 2 偈より後のことに関しては、或いは書かれなかったということも必ずしも無下に否定はできない、ということにもなってこようからである。

ともあれ、ここではそれに記された偈頌に注目し集中するということでは、先ず、これらの韻律は第 1, 2 偈ともに半行 (half verse) が 16 音節からなる所謂 *Śloka (= Anuṣṭubh)* で、更に言えば、その中でも特に第 1 偈については第 1, 2 行とも *pathya* (長短調は, UUUU | U--U | UUUU | U-UU) で、また第 2 偈の第 1 行は *na vipulā* (長短調は, U-U- | UUUU | UUUU | U-UU²⁸⁾) で、それぞれ表されていると言ってよいであろう (第 2 偈の第 2 行は、残されていないために不明)。次に、この No. 204 の 2 偈を『ウダーナヴァルガ』のテキスト (刊本) と比較してみると、両者の間には、極く細かい点に迄注意して言えば、かなり多くの相違点が見られる。そして、全体としては、文法的にはかなり整備されている等のこともあって、後者 (『ウダーナヴァルガ』) の方がより新しいと考えるであろう。ただし、それ以上のこと、つまり両者相互の関係等については、例えば後者は前者から改められたのかそれとも両者は別系統の異本ということになるのか²⁹⁾等のことがらに関しては、別に考察・検討しなければならないということになるだろうが。それはさておき、ここではその件についてはこれ以上立入らないこととして、以下、上記の韻律等を手掛りに本題のテキストの再構等の問題に入っていくことにしたい。参考のため、末尾に『ウダーナヴァルガ』の刊本から、対応する冒頭の一部を一緒に掲げておくことにしよう³⁰⁾。

sidhya me

vi¹¹ na mi tu¹² [śi]¹³ ro¹⁴ k [r] tva

saṃpr[e]ṣitva mānasa

siddham*¹ me

stīnamittam*² vinokṛtvā*³

saṃpreṣitvā ca*⁴ mānasam |

(10)

śrunota me pra [ś]i¹⁵ che¹⁶ mi¹⁷

a¹⁸ t.¹⁹ -²⁰ budhabhaṣita

eva vukta bhagavata

vi pra mu … e

śrunota*⁵ me pravikṣāmi*⁶

udānaṃ*⁷ buddhabhāṣitam || 1 ||

eva*⁸ vuktaṃ bhagavatā

vipramu*⁹

11 sti. 12 ta. 13 vi. 14 no. 15 vi. 16 c̄ha. 17 ga. 18 u, vu, dha. 19 ja. 20 -de.

Udānavarga, I, 1-2.

siddham

stīnamiddhaṃ vinodyeha sampraharṣya ca mānasam |

śrṇutemaṃ pravakṣyāmi udānaṃ jinabhāṣitam || 1 ||

evam uktaṃ bhagavatā sarvābhijñena tāyinā |

anukampakenarṣiṇā śarīrāntimadhāriṇā || 2 ||

[和 訳]

私に完成のあらんことを！

1. 倦怠と眠気を取り除き、心を奮い起して、汝らは私〔の言葉〕に耳を傾けよ。仏の説かれたウダーナを私は〔説き〕始める（語る？）ことにしよう。

2. このように世尊……は言われた。

*1 原綴の dhya は dhaṃ の写誤？と見て、かく改める。なお、dhya を dhaṃ と読む—— dhya は dhaṃ と読み得る?! —— ことに関しては、例えば No. 514 の注11（の異読）も併せ参照。

*2 =stīnamiddhaṃ. この語については、see *BHSD*, s. v. 'stīna' & 'styāna-middha'.

*3 or vinā⁰?

*4 韻律上、*Uv* を参考に、補う。

*5 =śrṇuta. opening に UUUU という形を避けるための、*m. c.*?

*6 =pravikṣyāmi. (pravakṣāmi = pravakṣyāmi の写誤?)

*7 後掲の *Uv* を参考に、回復・復原して補う。

*8 =evam, m. c.? (若しくは, 次の v は m の弱化形で, eva vuktam=evam uktam?)

*9 vipramuktena tāyinā? (原綴の e は te 若しくは ta の写誤?)

(3) *Khar Insc, No. 501*

No. 501 は, 形状上は 'oblong tablet' とされ, 両面に書写されている。表面に5行, また裏面には1行記され(残され)ているが, その表面の最後の2行は板を180度回転して他端から書き始められるという, やや複雑な?書かれ方をしている。それはともかく, 前述のようにこの No. 501 には 'sila' その他の仏教用語が多々見られ現れるので, 仏教に関するものであることはほぼ疑いなしと言ってよいであろうが, しかしその一方では, 本文書の文字には読みに疑問が持たれ若しくは判然としていなかったのではないかと推測・想像されるものが多く, テキストの読みのままでは, 文章としてはもちろん個々の単語としても理解—解釈し得ないものが殆ど大部分であると言っても過言ではないであろう³¹⁾。ということで, この No. 501 に関しては, それが果して偈頌で表されていたのかどうかということも含めて, 筆者には殆ど間然するところがないので, ここでは注記・注解等のことは一切断念し, 省略するということにしたい。(未完)

*筆者は, 本誌の先号(『創価大学人文論集』第9号, 1997年3月刊)において, 「黄文弼『塔里木盆地考古記』所掲の一梵文断簡について」なる表題の下に一文を草し, その中で, 黄氏の同書中に掲げられた一写本(の写真)に関して多少の考察を試みてみたのであるが, その際, 該写本に対するこれ迄の研究については, もしそのようなものがあつたとしても筆者は知らず, またそれ(写本)の内容に関しても, これ迄知られなかった新しいアヴァダーナ文献?の一種ではないか, との旨を述べておいた。ところで, その後, 実は黄氏の同書に対しては既に E. Waldschmidt 教授の書評があり (Chinesische archäologische Forschungen in Sin-Kiang (Chinesisch-Turkistan), OLZ Nr. 54, 1959, SS. 229-42. 後, ditto, *Ausgewählte kleine Schriften*, Stuttgart 1989, SS. 173-79 に再録), また, その中で同教授は件の写本にも触れて, それをローマ字転写して掲げるとともに, 内容に関しても漢訳の『雑阿含経』(第1107経)に対応するとの指摘をされていることを知った。更にまた, 該写本のローマ字転写に関しても, 教授のそれと比べてみると, 種々誤りの存することも判明した。というこ

とで、該写本に関する先の筆者の論稿は、今では何らの意義や価値もなく、撤回一抹消さるべきものであるということになったので、そのことをここで表明しておきたい。なお、Waldschmidt 教授の論文(書評)に関しては、大阪大学の榎本文雄氏からご教示を頂いた。同氏には心から謝意を表したい。

注

- 1) カローシュティー文字は、前3世紀のアショーカ王の時代から紀元後の数世紀にかけて、西北インド(現在のパキスタン北部からアフガニスタン東部)を中心に使われていた文字で、これで表されたものには、それ以外に、アショーカ王の2つの碑文や種々の金石文、それにコータンから出土したという『法句経』(所謂 *Gāndhārī Dharmapada*) の断簡などがある。
- 2) 1900~01, 1906~08, 1916~18年。ただし、彼は1930年にも同地方に入っている。ので、それも加えると4次ということになる。
- 3) A. M. Boyer, E. J. Rapson, E. Senart & P. S. Noble, *Kharoṣṭhī Inscriptions discovered by Sir Aurel Stein in Chinese Turkestan*, pt. 1-3, Oxford 1920-29 (以下, *KharInsc* と略)。その中, pt. 1 には第1次の時の427枚, pt. 2 には第2次の時の281枚, pt. 3 には第3次の時の49枚と Huntington の将来した7枚の, 計764枚分が収められている。また, 1930年の(第4次の)時のものは, Burrow によって別に出版がなされている。T. Burrow, *Further Kharoṣṭhī Documents from Niya*, BSOS vol. IX, 1937. カローシュティー文書は, その後新中国になってからも発見・発掘されているが(この点に関しては, 後掲の林梅村氏の「研究目録」の208-09ページ, など参照), 特に近年の日中共同隊によるそれについては, 1991年度のもので蓮池利隆氏によって, ローマ字に転写され和訳を添えて, 出版されている(『ニヤ遺跡出土のカローシュティー文字資料の研究(1)』『中日・日中共同尼雅遺跡学術調査報告書』第1巻, 日中共同ニヤ遺跡学術調査隊, 1996年, 所収)。
- 4) 因みに, 長沢和俊氏によると, これらの世俗文書は, 王の命令・通達(判決・訓令・徴税など), 個人間の手紙(公用または私用), 各種契約書(土地・奴隷・養子・売買・貸借関係その他), 各種リスト(人名・家畜・農作物・徴税表・帳簿断片その他)の4種に大別されるという(『楼蘭王国』角川新書, 昭和38年, 111-12ページ, 及び同『楼蘭王国史の研究』雄山閣出版, 平成8年, 310ページ, など参照)。
- 5) 例えば, 井ノ口泰淳氏は, 文書番号等の明示はないものの恐らくは Nos. 510, 511 と推測される2文書への関心を示され(『カローシュティー文字資料と仏教』『仏教史学研究』第36巻第1号, 1993年。これは, 言わば講演会の筆記録で, 後にやや体裁を変えて, 同『中央アジアの言語と仏教』法蔵館, 1995年, 及び前掲『中日・日中共同尼雅遺跡学術調査報告書』にともに再録), また, その両文書に関しては蓮池利隆氏の研究がある(『新疆ニヤ遺跡出土の仏教文献について(1)(2)』『印度

- 学仏教学研究』第44巻第2号、及び同第45巻第2号、1996、97年)。
- 6) 具体的には、'bodhisattva' は No. 288 に 'pracaṣṭha bodhisattvaṣa' (= pratyakṣa-bodhisattvaṣya, 現前の菩薩たる) なる複合語の形で、また 'mahāyāna' も同じく No. 390 に 'mahāyāna samprastitāṣa' (= mahāyāna-samprasthitāṣya, 大乘に発趣せる) なる複合語の形で、ともに「大チョーズボー官」(maha-/mahamta-cojhb. ただし、個人名は異なる) の称号(若しくは形容語)として、見られる。
- 7) 以下、文書番号だけで文書そのものも表すことにする(前注6)も同様)。
- 8) 因みに、これの表面はあるもののリスト(表)で、別内容の文書になっている。
- 9) A. M. Boyer, E. J. Rapson et E. Senart, Une Tablette Kharoṣṭhi-Sanskrite de la Collection de Sir Aurel Stein (N. XXIV, viii, 9), JA tome XII, Septembre-Octobre 1918, 参照。
- 10) 4偈の中では、唯一第2偈のみが *Mahābhārata* に対応する詩句のあることが指摘されているが (*Mbh* v, 36, 44. see T. Burrow, *A Translation of the Kharoṣṭhi Documents from Chinese Turkestan*, London 1940 [= *Translation*], p. 103), 残る3偈に関しては、まだ内容の比定や出典の解明等はされていないようである(少なくとも、筆者はそのような研究のあることを耳にしていない)。
- 11) 前注10)でも触れたように、第2偈は *Mahābhārata* からのものとされているが、残る3偈に関しても、例えば仏教用語が見られる等といったようなことはなく、内容の上から言っても、必ずしもそう簡単に仏教のものと断言することはできないように思われる(因みに、後掲の林梅村氏の「研究目録」では、この No. 523 を 'Sanskritized verse' として「仏教文学」(Buddhist literature)の項中に収めている。同論文、232ページ参照)。
- 12) 林梅村「中国所出佉盧文研究目録(1875—1992)」, 馬大正他編『西域考察与研究』新疆人民出版社, 1994年, 所収。
- 13) ただし、この *Udanavarga* の偈は表面の一部に書かれているだけで、後述のように、表面の残り部分と裏面はそれぞれ別の文書になっている。
- 14) この No. 501 も、何字分目か毎に字間が開けて書かれているので、偈頌で表されていた可能性は多分にあると考えられるが、しかし、それら字間ごとの字数は必ずしも一定せず、また判読(ローマ字転写)された文字の字音も判然としない——要するに、それらの字音を繋げても、有意な語句やまして文章などに再構成できない——ために、判断—断定ができないということである。
- 15) 具体的には、ここでは、通常は波羅提木叉(*prātimokṣasūtra*)の最後に付される撰律偈——所謂、(広義の)「七仏通戒偈」——を記した(と考えられる) No. 510 と、表面と裏面がそれぞれ別な内容を表した No. 511 の2つのことをいう。
- 16) 前注15)でも触れたように、No. 510 は内容的には波羅提木叉の最後の撰律偈に対応し、そこには、それに記された偈の番号で言えば、6偈——ただし、実際にはそれ以上?!——記されているが、それら6偈の中には、既刊の波羅提木叉のサン

スクリット・テキスト（それには、説一切有部、根本説一切有部、説出世部の計3部派のものが知られている）を参考に言えば——と言うのも、この No. 510 は、そのままでは判読が殆ど不能か、乃至は少なくとも困難な部分が多々存するので——、Śloka とその他に Aupacchandāsika と Vaitālyā のものがそれぞれ1つずつ含まれている。この No. 510 は、やや特異な性格なものと見て、ここでは敢えて含めないことにしたが、もしそれも含めて考えることにすれば、この Triṣṭubh-jagatī 等にはそれらつまり Aupacchandāsika, Vaitālyā の2つが更に加わるということになる。

- 17) ただし、その単綴が綴字通りに単子音的に発音されたのか、それともその本来形である複子音としてだったのかは、直接にそのことを物語るような資料は何も残されていないので、どちらとも言いようがないが、今はそこ迄は問わないことにする。
- 18) ただし、その複子音が語頭に来る場合には、仏教梵語でも多くそうであるように、必ずしもこの限りではない（単音として扱われていることが多い）。
- 19) 表面は一種のリスト（表）で、別内容のものになっている。なお、M. A. Stein, *Ancient Khotan*, vol. II, Oxford 1907, pl. CII にこれの図版も掲げられている。
- 20) 第2偈の第1詩句については、テキストの読みでは13音節あって、したがって一見したところ Triṣṭubh-jagatī とは見得ない如くであるが、しかし、この点に関しては、同詩句の第8音節は短音2つで長音に代替させる所謂 *hypermetric* の形になっているとして、そのことを認めれば、さして問題はないということになる。
- 21) 第1偈の第4詩句は、テキストでは6字目の *ṣi* と次の *chi* の間が1字分不明（若しくは欠字）のように記され、したがって、同詩句は、一見したところ全体で11字（11音節）から成っているように見受けられる。ところで、これの韻律が仮に Triṣṭubh-jagatī であったとすると、その *ṣi* の後の第7番目の音節は当然短くしなければならぬわけであるが、一方、他の文書での用例—用法を見ると、*ch < kṣ* の前では、その音節は母音の長短に関わりなく殆どの場合に長音のような——つまり、韻律上は、位置的に長い (*long by position*) 音としての——扱いを受けている。とすれば、もしこの場合にも同様であったとすれば、該 *ch < kṣ* の前で *ṣi* の直後には別にもう1音短音節の音（字）があったことになり、したがって、全体では同詩句も実は他の詩句同様に12音節（12字）から成っていたと見ることもできよう。そこで、もしそうとすると、この偈乃至は No. 103 の文書全体も、或いは Triṣṭubh-jagatī の一変形—特殊形とも言うべき *Indravamśa*（長短調は、—U | —U | U—U | —UU）で表されていたということも考えられるかもしれない。
- 22) 因みに、【カローシュティ—文書集】の翻訳=英語訳を行った——ただし、全部を完全にということではないが——Burrow も、これについてはただ注記で「崩れた判読不能な偈頌の存在」(At the end of this document there is a corrupt and unintelligible verse.) を言うのみで、偈頌自体の翻訳はしていない。see *Translation*,

p. 19.

- 23) 以下、参考のため、テキストに付された（主に判読等に関する）注もそのまま——テキストの言表や番号等通りに——一緒に掲げ、また、再構成した本文その他に関する筆者の注釈等は、*を付けた形で表すことにする。
- 24) 正確に、或いはより詳しく言えば、先ず、把手部分を右側にしたときの長方形の長辺部分の上側に2行と、その反対側に逆向きに——つまり、180度回転して、同じ側に同じ向きに——同じく2行書かれ、次に、その両者の行間の間隙に、90度右=時計回りに回転した——したがって、把手部分は下側に来ることになる——ときの上辺=短辺に沿って、それぞれ5行ずつが上下2欄に分けて書かれている、ということになる。なお、この文書に関しては、see Stein, *op. cit.*, vol. I, p. 398 & vol. II, pl. CI.
- 25) 因みに、(長辺の) 上側には日付その他のことが記され、また、それ以外の表裏両面の各欄は何かのリストになっている如くである。そのリストは、或いは所有者名とその所持品数、乃至は何かに関係する人名等を表すものかもしれない、もしそうとすれば、その人名と覚しきものの中には 'dharmaśura' (= dharmāśūra) や 'dharmaśreṭha' (= dharmāśreṭha) 若しくは '[k]uasaśaṃghaśa' (= [k]uasa (?) śaṃghasya) の如きものも見られるので、これらは出家者(比丘)名を表ししたがって文書全体も広い意味では仏教に関わり仏教のものであると見得ないかもしれないが、しかし、この場合には、そこ迄考慮する必要はないであろう。
- 26) このことは、Burrow には気付かれなかったようで、彼は、本題についてはリスト部分と一緒にして「間に崩れた仏教の偈頌を伴った人名リスト」(The rest of the document consists of a list of names with a corrupt Buddhist verse in the middle.) があるとのみ言って、翻訳はもちろん内容に関する言及も行っていないが(see *Translation*, p. 37), その後『ウダーナヴァルガ』を校訂出版した Bernhard 氏によっては知られ、指摘されている(F. Bernhard, *Udānavarga*, Bd. I, Abhandlungen der Akademie der Wissenschaften in Göttingen, philologisch-historische Klasse, dritte Folge Nr. 54, Göttingen 1965, S. 95 参照)。林梅村氏の比定一判断も、恐らく Bernhard 氏の研究によったものであろう。
- 27) 因みに、この第3偈というのは、漢訳では「諸行無常 是生滅法 生滅滅已 寂滅為樂」の訳文で知られる所謂「雪山偈」になっている。
- 28) na vipulā には、この他に UU— | UUUU | UUUU | U—UU という形も許され、第2偈の第1行は実はこちらの型に当る。
- 29) この問題に関して、(もしそれが残されていれば) 重要な手掛りを与えてくれると思われるのが、年代的にはこの文書とも比較的近く、『ウダーナヴァルガ』諸写本の中ではやや特異な地位を占める、その最古のものとする所謂「スバシ写本」ということになろうが、しかし、同写本には、当該の部分は残念ながら残されていない。

(16)

30) Bernhard, *op. cit.*, S. 95. なお, 同書には, この No. 204 からの著者による再構形も一緒に掲げられている。筆者がそれを参考にし, 若しくは従った部分もあるので, 念のためにそれも下に掲げておこう (同書ではイタリック体で表されているが, ここでは立体に改めておく)。

sidhya me stinamita [vi]nok[r]tva sampr[e]ṣitva mānasa
śrunota me pra[vi]ḥami ut. — budhabhaṣita (*sic!*)
eva vukta bhagavata vipramu ... e.

31) そのようなためもあろう, これに対しては Burrow も, それが「文学作品 (の一部)」であることは認めながらも, 「判読しようにも余りにも不完全で, 何より崩れ過ぎていて理解不能」(This is a literary piece. But it is too imperfectly legible, and apparently too corrupt in the first place to make much of.) であるとして, 翻訳については放棄・断念している。see *Translation*, p. 97.